

スポーツ選手における励まし言葉の捉え方 ー学生スポーツに着目してー

日本語学ゼミナール 1216178 森 優太

1. 研究動機・研究目的

近年、スポーツ界においては、指導者が生徒に対しての暴力行為、いわゆる「体罰問題」が後を絶たない中、一方で「言葉の暴力」による問題も多く取り上げられている。指導者が生徒に対しての事だけでなく、生徒同士によるケースも決して少なくない。指導側の一方的な意図で言葉をかけたところで、選手と指導者との間に言葉のギャップが生じれば、相手に言葉の意図が伝わらないことが考えられる。

以上のことから、学生スポーツに取り組む大学生を対象とし、言葉かけの分類を行い、その中から励まされたと捉えられる言葉を調査し、多く使われている言葉かけの傾向を比較したい。また、研究を通して、今後のスポーツ界における言葉かけの幅を広げるだけでなく、専門種目による有効な言葉かけを厳選していくことを可能にし、指導法の発展につなげることを前提としたうえで本研究では、自分や自分の周りの実体験を元に、言葉かけによって生じる言葉のギャップ（捉え方）を調査する。指導者から選手へとといった、一方的な言葉かけの型に限らず、誰からの言葉が最もその人にとって影響をあたえるものなのか。同じ言葉でも、かけられる人によって受け取る側の気持ちの変化があれば、いかに、人間関係による信頼関係、信用性が重要視されているかが明確になる。人は、自分のどのような部分（内面的な部分、動き、取り組み、判断力、存在意義、シンプルな言葉かけなど）を褒められることでモチベーションの向上につながっているのか。競技特性や男女差、個々の性格による言葉の捉え方の傾向を明らかにすることで、今後のスポーツ界における言葉かけの幅を広げるだけでなく、専門種目による有効な言葉かけを厳選していくことも可能である。

指導側、指導される側、いずれも非常に大きな影響力をもたらす「言葉」。その選手がどのような言葉をかけられると励まされるのかを熟知しているのは、両親や兄弟、親しい友人の可能性もあることから、そういった意味では、指導者とは、監督、コーチのことであると一概には言い切れないと考えられる。個々で信頼を置いている人物が異なることから、どの立場の人間に励まされる傾向が多いのか。また、励ます言葉の種類はどのようなものか。本研究において、分析に当たり、言葉をかける側、かけられる側のギャップを埋めていくことで、スポーツ競技への指導法の発展につなげることを目的とする。

2. 研究方法

研究方法としては、ウェブアンケートを用いたアンケート調査を実施した。

本研究におけるアンケート調査に協力してくれた学生は、日本の関東圏の大学（学年問わず）に通い、運動部に所属している男子学生 60 名、女子学生 12 名、それぞれ専門にしている競技種目の異なる計 72 名である。

質問項目は、「励まされた言葉は何か。」「その言葉は誰からかけられたか。」「その言葉はどのような形で聞いたか。」の 3 つである。

3 つ目の質問に関しては、回答選択肢（1. 直接言われた 2. 第 3 者を通して間接的に聞いた）の 2 つに加え、3. その他（自由回答）の計 3 つを作成した。言葉かけの傾向を調査するうえで、質問数は必要最低限で可能なことから、質問項目を 3 つに絞り込んだ。

本研究におけるアンケート調査に協力してくれた学生は、日本の関東圏の大学（学年問わず）に通い、運動部に所属している男子学生 60 名、女子学生 12 名、それぞれ専門にしている競技種目の異なる計 72 名である。

3. 主な結果と考察

本研究結果において、明らかになったことは 2 つ。

1 つめは、選手が励まされたと捉える言葉は、意外にもシンプルであったこと。指導者であれば、選手への技術面の指導も多くなされている。したがって、繊細な言葉かけによるアドバイスを選手は求めているのではないのだろうかという推測を立てた。しかし、集計を行ったアンケートの分析に当たったところ、「よくやった」という一言によって、選手たちは励まされているこ

とから、自分の予想と反する回答が多かったことが多かったことが1つ。

2つめは、言葉かけにおいて、「信頼度」が重要視されるということ。信頼関係の構築度合いにより、「言葉」そのものの説得力、捉え方が左右される。「発破をかける」言葉かけにおいては、特に必要不可欠な条件の1つということはいえる。

4. 結論

言葉かけにおいての「信頼度」による言葉選びは必須であり、言葉のギャップがお互いに生じない関係性を日頃から築いていくことが言葉以前に最も重要であるといえる。また、指導者がかける言葉かけは技術に対するアドバイスより、内面的なことを褒める言葉かけによって選手は励まされていることが多いことが明らかとなった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文を書き終えたことで、言語要素からもスポーツに生かせることは多く存在することを改めて実感した。自分自身の競技にフィードバックできることが最も卒業論文に取り組む中で、充実感を覚えた。そして、何より言葉をかけてくれる存在に選手は感謝の気持ちを持つことを決して忘れてはならない。スポーツに限らず、自分の好きなことすることに対しての後押しをしてくれる周りの人たちがいることで今の自分が成り立っているということ。これは、勉学においても、スポーツにおいても共通して断言できることだ。